

豊竹座退轉

これも越前少掾の奢りから



豊竹少掾の像

さて一方東の芝居の豊竹座の方はどうなつてゐるかといふと、既に前條義太夫旗上げ當時に記したやうに、豊竹若太夫が義太夫の門から分離して、此座を築き上げたのだが（此冊子では、淨瑠璃の根幹がどうして『文樂座』への系統をつゞけてゐるかといふことを説くのが主なる目的だから豊竹座のことは枝葉に亘るから大略は省いてゐる）。此人は竹本の流を豊かに語るといふ意で豊竹と名づけ、世間からも、古今マカンの優れた美音は此人を措いて外になしと云はれてゐるくらい、豊艶華麗な聲と節との持主で、従つて後年に及んでも、竹本座の勢力と相拍仲して人氣を持続することが出来たのである。この人も政太夫と同じやうに、船場の産れで、河内屋勘左衛門と云つた豪家だつたのだから、座主と金主、太夫、作者をまで兼ねた三面六臂で、而かも八十四歳の高齡を保つたといふのだから、随分幸運兒だと云つてもいい、ところが此人も竹本座二代の座主竹田近江のやうに、晩年は殊に豪奢をこゝとした上に天災に見舞はれて、やはり用じやうな終末をつけてゐるから不思議である。前段のことは省くとして、豊竹座退轉當時の状況をすこし述べて置かう。その前にこの座も竹本座の國性爺のやうに、寶曆七年十二月『祇園祭禮信長記』を出して三年越しの大當りを取り、なか／＼の全盛ぶりを見せてゐたことを記憶して置いて貰ひたい。それが僅か數年後の寶曆十一年二月と、十三年一月の兩度、類焼に遇つて芝居は全焼、居宅も土藏まで焼いて失ふといふ慘憺たる光景である、如何に富やかな生活もこれでは聊かまゐらざるを得ぬ、銀七百貫目の損害だといふのだから可なり大きい。日々の驕りを極めた生活の上へこの火災だから、さしもの越前小掾家も餘程傾いたに違ひない、さうして此禍ひの三年目明和元年九月十三日、八十四歳をもつて他界した。以前享保九年の大火後、直に道頓堀嵐

の芝居を買収して、豊竹座を新築し、次第に全盛を極めた此人が、寶曆の火災が原因で遂に家も命も滅ぼしたので、火事で成功して火事で亡くなつたといふ不思議な因縁である。おまけにこの家の跡目を襲いだ俵の豊竹甚六、これが名の通り惣領の甚六で、財政の整理をするどころか、藝術などのことは微塵も念頭にかける心がけはなくて、道楽三昧に日を送り、殊に茶道に耽溺し三百兩もする高價な茶碗を他人に見せて誇つてゐるといふやうな人物だつたから、父の死後程なく家財は人に渡り、續いてさしもの豊竹座までも明和二年八月三十日をもつて閉鎖するの止むなき運に陥つてしまつた。

以上豊竹越前少掾の最後にまつはる、一つの因果話がある。

伊丹の里の酒造家に稻寺屋といふ豪家があつた。數奇を極めた宏壯な居宅は、主人の好みに任せてあらゆる贅がつくされてあり、殊に庭園の布置は一木一石にも心をこめて作られてあつたが、さてかうなると、なんでも珍らしいもの、めづらしいものへと嗜好が馳つて行つて、日本に一つ或は世界に一つといふやうな珍品を見たり聞いたりするたびに手に入れたといふ型の如き金持心理に捉はれて行つたものと見へる。ところへとう／＼主人の所有慾を満足せしめるに充分なものが、こゝに一つ手に入つて來た。それは、大和の在原寺に古く寺寶として置かれてあつた例の有名な業平の井筒である。伊勢物語に『筒井筒いづくにかけし……』と詠まれてゐるその井筒が手に入つて來たのである。銀四百枚で寺僧から譲り受けたのであるが、これなら日本はふるか世界中にも二つとはないのだから主人は大喜びに悦んで、これを自宅の庭園に据へつけて人々に誇つてゐた。ところが間もなく、此井筒の崇りだといふのでさしもの稻寺屋も瞬く間に亡びてしまつたのである。その後三十年の星霜が經つて、この稻寺屋の屋敷跡の茫々たる草つ原に、この恐ろしい名残りを物語つてゐる古井筒が草に埋れてたゞ一つ抛り出されてあつた。その古井筒に目をつけたのが越前少掾である、さういふ故事來歴あることを知つてか知らずにか、越前少掾もやはり稻寺屋の主人のやうな金持心理をもつてゐた上に、殊に茶道に心酔してゐる絶頂として、この寂びのついた古井筒を、茶室の庭に移して見たくて堪らなかつた。そこで後繼者の人から二十兩といふ代價でこれを買ひ取つて、當時三津八幡筋に隱居所を持つてゐたから、伊丹から引き取つて、その庭園へそれを据へつけたのである。井筒の崇りはこゝでもう一度その魔力をあらはして、程なく前記のやうに越前家をめちや／＼に叩き壊はして、赤い呪ひの舌を出した。といふのである。もとより迷信、執るに足らぬ傳奇物語の一つではあらうが、この傳説の井戸が、どこをどう廻つて來たのか、現在大阪第一流の富豪のお庭に、チャンと收まりかへつて現存してゐるのは、傳説以上の珍ではないか。

豊竹座の座附作者として、後來その名を残した紀海音の略歴を記して置く。

榎並氏、喜左衛門後に善八と云ひ、父は鯛屋善右衛門とて菓子商。兄は有名なる狂歌師、油煙齋貞柳。善八寛文三年に生れ後ち俳諧を貞室に學び、大和柿本寺の僧となり、或は醫となり、契仲に従ひ國學和歌に遊んで後ち遂に若太夫の爲めに豊竹座の作者となる。竹本座の近松と相對して生涯を淨瑠璃の作に貢獻する處多い『心中涙の玉の井』『八百屋お七歌祭文』『油屋お染袂白絞』『心中二つ腹帯』等有名なる作その他多し。寛保二年十月四日歿す、八十歳。

豊竹座歿落の後ち、その殘黨は散り／＼になつて、その後形骸をのみ止めてゐる竹本座へ行くもあれば、また辛くも再興された豊竹座へ加はつたものもあり、さまざまな末路を見せてゐるが、その一部は北堀江市之側の西側に新築された芝居へ出て、この座が二代目此太夫、二代目駒太夫、麓太夫などの太夫達で天保頃まで持續してゐて、今日名作として傳へられてゐる、菅專助作『染模様妹背門松』や『紙子仕立兩面鑑』など此座から出してゐる。

要するに義太夫節創立の殊勲者竹本義太夫の直接的な血脈をひいてゐた竹本豊竹兩座歿落後の淨瑠璃界は、もはや一人の傑出した人物が出なくなつて混沌たる状態をつゞけてゐた……天明……寛政……文化文政……と云つた年代の淨瑠璃界へ、こつり／＼と地面の下から頭を擡げ出さうと活動し出したのが文樂座で、この文樂座と云ふ新しい操劇場が遂に中央集權を握つてしまつて完全に第二世竹本座の貫祿を具備することゝなり、それが現在に至るわけである。以下は即ち文樂座時代の項に於て述べることゝする。

八年の三月には『けいせい曾我廓賑』對面。『姫競双葉繪草紙、浪七内』『新薄雪、清水』『二十四孝勤助内、十種香』を出し、玉造(小栗判官、横藏)春太夫(正宗)彌太夫(景勝、東馬)組太夫(浪七)重太夫(太郎)氏太夫(母越路)玉治(五郎)越路太夫(八重垣姫)廣助(勘助)住太夫(信玄)。淨瑠璃勝七、三味線住太夫、須磨太夫、越路の八重垣姫など頗る珍さすべく、チヨホのあべこべも大いにそり氣分で見物を喜ばした。